



「湿地の神」発行に寄せて

理事長 百瀬邦和

2026年早々に「湿地の神」を発行することができました。この本は、私たちがこれまでに作成した3冊の小冊子を再編集し、内容を増補、改訂して一冊の本にまとめたものです。この本では、新しい内容としてツルとヒトとの関わりを文化的な視点からまとめた章を加えました。古来よりヒトはツルへの興味を持ち、様々な思いをツルに託してきました。この本を通じて、ツルへの興味を持っていただき、私たちがツルに何を託しているのか、これから何を託していこうとしているのかを知って欲しいという気持ちからです。

本書の前書きで、次のように書きました。

「私たちは、できるだけ多くの方々にタンチョウという鳥を知っていただきたい、という想いでこの本を作りました。タンチョウという鳥は、その大きさ、姿かたち、動きや鳴き声、そしてそれらの特徴をもとに描かれた絵画などをおして広く知られています。そのタンチョウへの興味をもっと深め、そしてより好きになってほしいというのが私たちの願いです。そういう想いで、国と言葉の壁を超えた仲間たちが3年に渡って話し合いを続け、国際タンチョウネットワーク（IRCN）というグループを作りました。この本を手にした方々には、タンチョウをおして、私たちを含めたすべての生き物は同じ地球で同じ時間をともに生きている仲間であることを改めて思い起こしていただきたいのです。今の時代、私たちはそのことを意識しなくなっているように思うからです。」

今回、私たちは「湿地の神」の作成にあたってクラウドファンディングを実施しました。出版費用への援助をいただくという目的と同時に、この本に託す私たちの思いを多くの人に知っていただきたいと考えたからです。この本をより多くの人たちに知っていただけるように、本を活用した私たちタンチョウ保護研究グループの活動を進めていきたいと思います。

巻頭言 . . . 1

「湿地の神」が完成 . . . 2

世界のタンチョウ . . . 2

野生タンチョウの攻撃 . . . 3

193のつづきの話 . . . 6

井上雅子ハウス . . . 7

<活動記録> . . . 9

「湿地の神」が完成しました

We have published a book titled "God of the Wetland"

タンチョウ保護研究グループ(RCC)の編集、出版によるタンチョウの本「湿地の神」が出来上がりました。この本は以前RCCと国際タンチョウネットワーク(IRCN)が共同で発行した小冊子「湿地の神Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を基に最新の情報を加えて再編集し、Part1:形態、Part2:生態・行動、Part3:保全、さらに新たな項目としてPart4:文化的意義を加えました。内容は写真や図を使うことによって可能な限り文字による説明を減らし、前シリーズと同様に、タンチョウの生息する東アジア4ヶ国語に、共通語としての英語を加えた5ヶ国語で記載しました。

今回のプロジェクトではクラウドファンディングによって資金を募り、目標額を上回る344万円ものご寄付をいただきました。出来上がった本は1000部印刷し、現在までに200ヶ所程の北海道内を中心とした自然系のビジターセンター、博物館施設、自然保護団体等に配布して活用していただいています。今後は先方と協議しながら教育関係施設等に寄贈していく予定です。また、本プロジェクトを共同で進めてきたIRCN(国際タンチョウネットワーク)に、PDF版に加えて製本版も提供する予定です。

今回のプロジェクトは、国境を超えて多くの方々にタンチョウという鳥への興味を深めていただきたいという目的で進めています。タンチョウを通して生き物としてのヒト、そして生物集団としての人の社会を考え直す契機にさせていただきたいと思うのです。

本を寄贈した施設では、利用者に手に取って見ていただき、本に込めた思いを感じ取っていただきたいと思います。そこでこの本を一部施設や書店でも販売し持ち帰っていただけるようにしました。

「湿地の神」製作はここで終わりではありません。この本ををきっかけにして、タンチョウに関わる人たちや各団体とつながりを作り、「それぞれの人・団体に何が必要で、何ができるか」について話し合っていきたいと思っています。そして、次の新しい「湿地の神」の出版の時に報告ができればと考えています。

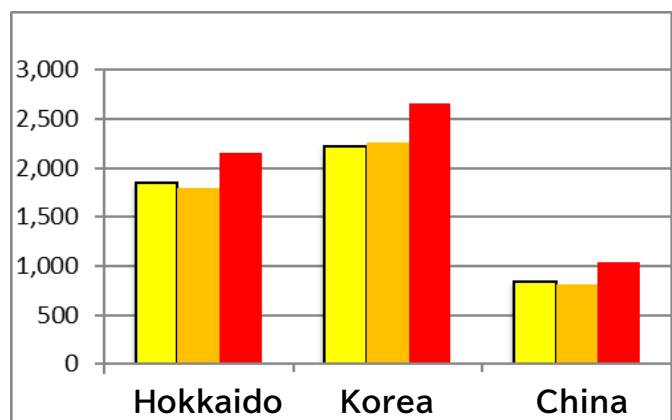


世界のタンチョウ カウント数

Global Red-crowned Crane Census

国際タンチョウネットワーク(IRCN)による各地の調査結果がまとまりました。韓国は前年から約400羽以上増えて2704羽、中国は同じく200羽以上増えて1033羽、日本(北海道)は350羽増えて2150羽となりました。全体では1003羽増の5887羽となり、始めて5000羽を超えました。各地の増加状況はほぼ同じ傾向のようですが、大陸での増加はCOVID19発生時に中国各地で多数放鳥された影響が続いていると思われます。北海道においては、調査期間前半まで目立って雪の少ない状況が続いていたため、例年に比べて畑などの開けた

2023-2025年までの3年間の各地域のタンチョウの総数



野生タンチョウの他個体への攻撃の観察

矢萩 樹

Observations of wild red-crowned cranes attacking other individuals

この記事は、8年前の冬、タンチョウ保護研究グループのカウント調査の際にタンチョウの争い行動が観察され、最終的には当日調査に参加していたメンバーが協力して、片翼を痛めて飛べない個体を保護収容に至った顛末です。このタンチョウを最初に目撃し、最後には川に入ってびしょ濡れになりながら最後の保護収容まで関わった、当時釧路公立大学の学生だった矢萩さんが「反省文」とタイトルをつけて詳しくレポートを残してくれました。ソルを確認した際の状況から、その異常を感知した観察眼、その後のソルの個体間の行動の様子、直接の争いに敗れた後の生き残りに賭けた敗残ソルの生存をかけた行動、等にはとても興味深い内容がリアルにレポートされていますので、以下に紹介させていただきます。（事務局）

2017年2月6日、タンチョウ保護研究グループの総数調査中に野生タンチョウによる他個体への攻撃現場を観察しましたので、その内容について報告いたします。

私は住吉さんとともに標茶町南標茶・ルルラン・厚生地区の巡回を担当し、車で移動しながらタンチョウを探していました。タンチョウの他個体への攻撃を観察したのは、この日2回目の厚生地区での巡回の最中でした。

厚生地区の巡回調査は2回行ったのですが、1回目の巡回の際には、5個体のタンチョウを地点Aで観察していました。観察した個体の内訳は、成鳥3羽と幼鳥2羽で、ヒナ2羽連れの家族と単独の成鳥ではないかと考えられました。我々はこの個体の構成に疑問を抱きました。なぜなら成鳥がつがいではなく、単独で別の家族の中で観察されたからです。そこで私は、住吉さんの指示ではほかの個体がいらないか、死角となっていたクニクンナイ川と並行する水路の中や周辺を双眼鏡でくまなく探しましたが、このほかの個体は見つかりませんでした。また、この際にタンチョウの個体間による闘争や攻撃は観察されず、ケガをしている個体がいることにも気が付きませんでした。

この日2回目の厚生地区の巡回では、はじめに、小野寺牧場前の公道上で成鳥2羽と幼鳥1羽の家族を発見しました。道路上にいたこの家族は、我々の車を見ると飛去し、クニクンナイ川東側の雪原の地点Bに移動しました。さらに車を進めると、地点Cで複数のタンチョウが見えましたが、雪の陰になってよく見えなかったため、私は車を降り、観察しやすい場所まで移動して観察しました。そこで、成鳥3羽と幼鳥2羽がクニクンナイ川から雪上を駆け上がるのを確認しました。この時、大きな警戒音が聞こえ、なにか不審に思いました。そこでよく観察して見ると、成鳥2羽が成鳥1羽を追って、突いているのです。特に、首や頭部を集中して攻撃しているように見えました。幼鳥2個体は攻撃には参加せずに近くでそれを見ていました。標識されている個体がいなかったため断言することはできませんが、個体の構成や観察地点の近さから、この5羽は1回目の巡回で地点Aにて観察した5羽と同一であることが推察されました。私は、1羽が攻撃されている旨を車中にいた住吉さんに報告しました。我々は、攻撃が行われている付近まで車で移動しましたが、地点Cで成鳥1羽が別の成鳥1羽の体の上に乗る、体上面を嘴で突いているのを確認しました。現場には、攻撃されている個体と攻撃している個体、その約3 - 4m範囲に成鳥1羽、約10メートル範囲に幼鳥2羽を確認できました。住吉さんは、このままでは攻撃された個体が死亡する可能性があるかと判断し、攻撃をやめさせ、可能であれば攻撃されていた個体を収容するように私に指示しました。指示を受けた私は、公道からひざ上まで積もった雪を漕いで攻撃されている現場まで歩きました。私が攻撃されている現場に向かっていく途中も成鳥1羽は攻撃をやめることはありませんでした。攻撃されている現場まで約5メートルまで接近すると、攻撃に参加していない幼鳥2羽と成鳥1羽は飛去していきしましたが、攻撃している個体は飛去することなく、なおも攻撃を続けていました。私が現場まで約2 - 3mまで接近し、手を大きく振ると、攻撃していた成鳥1羽はようやく突くのをやめて、飛去していきしました。この時点で、現場には攻撃されていた1個体のみが残っていました。近づいて見てみると、攻撃されていた個体は、体下面が雪に埋もれ、頸から先はどこかに隠しているのか見えず、左翼は雪上の上に開き、翼角に傷が見えました。接近しても動かなかったため、私はその個体が死亡しているものと思い込みました。そこで、収容しようと背中に触れると、その個体は急に立ち上がり、嘴で攻撃してきたため、私は驚いて手を放して

しまいました．やってしまいました．その結果，タンチョウは雪上を転げ落ち，クニクンナイ川の中に転落してしまいました．この地点は，川までが急な雪の崖になっており，ここからクニクンナイ川に近づくことはできませんでした．

我々は，攻撃されていた川に落ちてしまった負傷個体を検索するため，下流のすずかぜ橋のふもとに移動しました．この時点ですずかぜ橋からの可視範囲には，橋の上流側に小野寺牧場の家族3個体（成鳥2，幼鳥1），すずかぜ橋の下流側に成鳥2羽の計5羽のタンチョウを確認しました．この際，攻撃していた家族は観察可能範囲では確認できませんでした．この家族の飛去方向を追っていませんでしたが，どうやら別の場所へ移動したようでした．周囲に複数の個体がいるため，負傷した個体がさらなる攻撃を受ける可能性が懸念されました．

この時点で捕獲するかどうかは決定していませんでしたが，住吉さんと相談し，負傷個体の位置だけは確認しようと，クニクンナイ川の左岸側を上流方向に歩いてみました．しかし，負傷個体は見つかりませんでした．このことから，負傷個体はクニクンナイ川を上流に進んでいることが予測され，我々は車で移動して，川の右岸側を上流方向に歩いてさらに検索を行いました．その結果，川中で負傷個体を発見しましたが，さらに上流に向かって川中を歩いている最中でした．しかし，川が曲がりくねっており，これ以上の確認は難しかったため，上流の国道からクニクンナイ川を観察してみることにしました．すると，クニクンナイ川の中で左翼が落ち，翼角にケガをしている負傷個体を発見しました．観察の継続と同時に，住吉さんが，環境省や調査に参加していた他のメンバーと連絡を取り，捕獲に向けた調整を行ってくれました．

我々が国道からの観察を始めてから，負傷個体はその位置を動くことはありませんでした．しかし，地点Bにおりていた小野寺牧場の家族の幼鳥1羽が負傷個体の近くの雪原に飛来してきました．すると間もなく，成鳥2羽も幼鳥を追うようにして近くに飛来してきました．成鳥2羽は，川中にいる負傷個体を気にしているようで，雪原から川をのぞき込んだり，川岸に近づいたりしていました．その後，成鳥2羽が川中に入ると負傷個体を攻撃しはじめ，負傷個体はクニクンナイ川右岸の雪原に上がりました．しかし，小野寺牧場の家族の成鳥2羽は攻撃をやめず，負傷個体の体の上に乗る，頸や頭部を中心に嘴で突き始めました．最後に，成鳥1羽が負傷個体の後頭部を嘴で摘み，持ち上げていたのを見ると，頸が「だらっと」していたため，死亡した可能性が考えられました．我々は小野寺牧場前の道路に移動し，雪上を歩いて，攻撃されていた現場まで向かいました．しかし，その地点には血痕だけが残し，負傷個体はいませんでした．この時，小野寺牧場の家族3羽も飛去していませんでした．おそらく，負傷個体は再びクニクンナイ川を歩いていると予測し，私は下流方向に向かってさらに歩いていきました．その後，捕獲地点付近のクニクンナイ川の中で負傷個体を確認しました．ちょうどそのころ，最初に到着した2名の調査班がクニクンナイ川の左岸側の雪上を歩いてきていました．私は人員が揃うまでは捕獲の実施が難しいと判断し，この地点から負傷個体が移動しないように留めようと決め，私達3名で負傷個体を挟む態勢を作りました．

その後，調査を終了した参加者と（環境省から派遣された）猛禽類医学研究所の職員2名が到着したので，捕獲作業を行いました．

最初の攻撃現場で私が捕獲していれば，負傷個体はさらなる攻撃を受けずに済んだでしょう．このことを思うと，非常に悔しい思いです．しかし，攻撃しているタンチョウを見たためか，非常に怖く感じたというのが本音です．バンダーを目指している私にとって，まだまだ修行が足りないようです．今回は，負傷したタンチョウには申し訳ないですが，貴重な場面を観察することができました．この観察報告によって，さらなるタンチョウの生態解明や保全に少しでも寄与できれば幸いです．



捕獲作戦開始時に川中にいたタンチョウ

今回は，負傷したタンチョウには申し訳ないですが，貴重な場面を観察することができました．

この観察報告によって，さらなるタンチョウの生態解明や保全に少しでも寄与できれば幸いです．（矢萩）

レポートには捕獲作業の様子までは書かれていないので，その様子を写真を交えてお話したいと思います．このケガをしたタンチョウが川の中にいる場所を中心に，膝上まである積雪をこいでクニクンナイ川兩岸を10人以上の人員で取り囲みました．ところが人の気配を察したタンチョウが包囲を振り切る勢いで，川の中、

左岸へ、そして右岸へと逃げ回りました。一時は「死亡した」と矢萩さんに思わせたのと同じ個体とは到底思えない様子でした。この個体は片翼を骨折した状態でした。後日の調査で隣接した別の牧場主から話を聞きました。牛舎内にツルがいて、作業に入ってきた牧場主に驚き、牛舎内から飛び出す際に翼をぶつけて怪我をしたそうです。この時捕獲したツルと思われます。つがいから攻撃を受ける前に骨折していたようです。



川の周囲を包囲する



包囲をせばめる



川の斜面をかけあがる



包囲から逃げ出す



矢萩さんがツルの行く先をはばんで無事捕獲

タンチョウの争いの事例については、この事件の前にも2羽のタンチョウの争いが厚岸水鳥観察館のカメラで観察・記録されています。厚岸のカメラが捉えた様子は、湿原内のアシ原の中で、既に争っていた2羽の勝負がついていて、今回の事例と同様に、地面に伏せた個体の上に乗ってしきりに突いている1羽のタンチョウの様子が写されていました。この時は攻撃していた個体が一旦休んだ？隙に伏せていた方の個体がヨロヨロと立ち上がり数歩歩いたところで再び攻撃を受けて倒れ込む様子が見えていました。水鳥観察館の湍谷さんが現地に向かうとツルは息絶えていました。回収された死体は嘴で突かれて頭骨までがアナボコになった状態だったそうです。この二つの事例から、タンチョウが命をかけた争いで敗れた時のギリギリの生き残り作戦を見たように感じます。攻撃側の行動はどのように解釈したら良いのでしょうか・・・。（事務局）

193の話のつづき（動画撮影取材の旅）

Story of #193 , continued (A Trip to Film a Video)

前号で紹介したイッキュウさん（193の足環を付けたタンチョウ：越冬地ではイナミちゃんという呼び名でも親しまれていたそうです）の足跡を辿る動画の取材で、夏の生息地だった枝幸町の牧場に伺った時の話です。この牧場では牛の自己管理能力を尊重した自由放牧型の営農を実践していращやるので、20ヘクタール以上もある広い放牧地の中に三十数頭の色々な毛色の牛たちが歩き回っていました。採草地で定期的に行なっているような、いわゆる草地更新は行なっていないそうです。（草地更新とは：採草地は何年か利用するうちにギシギシなどの雑草が増えてしまうので、土を耕して新しい牧草の種を播きます）

牧場の方にツルのお話を伺っていたなかで、農作業中にタンチョウが放牧地に来ていたので、たまたま撮ったという写真を見せていただいたのですが、明らかにドジョウと解る魚を口に咥えていました。撮影したご本人も、何で放牧地の草の中でこんなドジョウを見つけたの？ と今も不思議に思っているそうです。

そこでふと思い浮かんだことがあります。古代ギリシャのアリストテレスがウナギは土から生まれると書いている、との書き出しで始まる「ウナギの話・・・」の本の内容です。ウナギは私たちにとっては食材としてはとても馴染みが深いのですが、その生態については今も知られていないところが多いのです。今回のドジョウは、少なくともその形や生態の一部はウナギと共通しているであろうことは容易に想像できます。もしかしたら、かつて川沿いの低湿地帯であったはずの放牧地にはドジョウが使える地下水脈がある？ あるいは稚魚か卵が泥と一緒に鳥や動物に運ばれて移動し、雨の降った後の放牧地内の一時的な浅い水たまりを頼りに成長することができる？ ウナギに限らず、特に湿原でのドジョウの生態について私たちは知らないのです。

改めて釧路湿原の魚たちは、そして魚類と同様にタンチョウのかけがえのない餌であるカニやザリガニ類、両生類、小型哺乳類、そして小型鳥類も・・・私たちは彼らのことをあまりにも知りません。既に20年を超えて活動している釧路湿原自然再生協議会での調査活動においても、動物の調査実績はごく僅かです。雑食のタンチョウは穀類を含む植物を加えて手に入るほぼ何でも食べていると思われますが、逆を言えば適当な季節を選んで何でも食べることで日本で最大級の体を維持できているということになるのかもしれませんが。湿地の神という象徴的な呼び名は、タンチョウが湿地そのものであるということ、そして湿地を構成している数多の生き物を代表しているということです。タンチョウを通して湿地全体をもっと良く知りたいものです。特に、直接目に見えない泥炭の中の世界も・・・。



井上雅子ハウス

～釧路市動物園にタンチョウの展示施設ができました～

A new red-crowned crane exhibit has opened at the Kushiro City Zoo

釧路市動物園に『井上雅子ハウス』（挨拶の中で釧路市の鶴間市長が使った表現です。正式名称は『井上雅子記念 釧路動物園Crane & Wetland Conservation Hubタンチョウと湿原の保全拠点』です。）の寄贈式がありました。この施設は井上雅子さんの遺贈で寄贈式には、井上さんの御姉妹が出席されました。

井上雅子さんは釧路動物園の開園から飼育員、学芸員として勤務されました。在職中からタンチョウの保護活動や調査活動に積極的に参加され、タンチョウ保護研究グループの設立の際にも尽力してくださいました。

さらに退職後は、標識鳥のデータ分析、会報やニュースレターの編集など、本会で精力的に活躍されました。今回のハウス（CWCH）開設は井上さんの遺志が反映されたものです。

日本の動物園では、展示している動物たちを解説する工夫や施設が十分とはいえないので、釧路市動物園にこのハウスが新設された意義は大きいものがあります。特に寒冷地である釧路では、暖房が完備された室内で来園者が展示資料を落ち着いてじっくり見学することができ、利用しやすいと思います。これからは私たちも動物園の利用者としてハウスを有効に活用していきたいと思っています。

タンチョウ保護研究グループでは、現在前号で紹介した標識タンチョウ193（イッキュウさんイクミちゃん）物語の動画を作成しています。またタンチョウに関する様々な情報も集積しています。今後はこのハウスへの展示情報の提供など、応援、協力をしていきたいと考えています。



<活動記録> (2025年9月~4月)

- 9月8日 会報Tancho54.55号発行
9月21-23日 枝幸町で標識鳥193の軌跡をたどる動画作成の取材(安井Y、百瀬)
9月29日 釧路湿原自然再生協議会 第2回 生態系再生小委員会に出席(百瀬)
釧路町教育委員会主催 大人も探究講座「ゆびおり大学」で講演(於:釧路町コミュニティセンター 百瀬)
10月9日 タンチョウ域外保全検討委員会(釧路市動物園主催)にWebで出席(百瀬)
10月10日 運営会議(5名出席)
10月15日 デニス・ミミアン氏、Jeiller氏の標茶・鶴居視察見学に同行(百瀬K、Y)
11月5日 2025年度第1回タンチョウ保護増殖検討会に出席(於:札幌 百瀬、富山)
11月6日 きたひろタンチョウ見守る会を訪問し、今後の協働活動について話し合い(於:北広島市 百瀬)
11月11日 北海道開発局の釧路湿原横断高速道路検討会に出席(Web:百瀬)
11月17日 釧路湿原の太陽光発電所予定地への文化庁係官ほかによる現地視察に同行(百瀬)
11月20日 河川協力団体(釧路川)管轄事務所意見交換会に出席(於:釧路市 百瀬)
11月22日 浦幌川(浦幌町)に監視カメラ設置、音別川の監視カメラの再設置(百瀬、住吉、富山)
11月27日 釧路川(標茶町)の監視カメラの設置調整(百瀬、住吉)
12月4日 標茶町中茶安別小中学校で、地元給餌人の丸山氏と一緒にタンチョウの授業をおこなう(百瀬)
12月10日 中標津 俵橋湿原にてニオ作成設置作業(百瀬、大河原、松野、田中Y、多田)
12月12日 運営会議(9名出席)
12月13日 阿寒川(釧路市阿寒町)に監視カメラ設置(百瀬、住吉、富山)
2月8-9日 EAAFP 渡り性水鳥フライウェイ全国大会に参加、発表(於:鹿児島県出水市 百瀬)
2月18日 「湿地の神」を発行
3月4日 釧路湿原自然再生協議会に出席(百瀬)
3月8日/15日 キナシベツ湿原トラストの家でFAに参加する大学生10名に講演(百瀬)
4月18-22日 十勝地方の繁殖状況調査(百瀬、富山、猪股)

< 会 員 > (2026年4月 30日 現在)

会員数: 115名 (運営会員: 15名、個人サポート会員: 100名 (卵 62、ひな 33、若鳥 4、成鳥 0、終身 1))

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Fifty-sixth issue May, 2026

<表紙写真 Cover photo>

2026年に生まれたばかりのヒナを
連れた270家族(池田町)

撮影者: 白川 朗子

認定特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ

〒085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>